

朝 日 の 間



国賓ベトナム社会主義共和国サン国家主席を
天皇皇后両陛下が御訪問(2014年3月19日)

「朝日(あさひ)の間」は、朝日を背にして暁の女神が四頭立てのチャリオット(香車)で颯爽(さっそう)と登場する天井画に由来します。

国公賓等のサロンとして使用され、表敬訪問、首脳会議などにふさわしい重厚で格調高い部屋です。

部屋の広さは約200㎡で、天井の高さは8.6mあり、天井の周囲4面の湾曲部分には、鎧兜、獅子頭、船首、桐の御紋章などが描かれています。

室内の装飾は、フランス18世紀末様式です。

16本のノルウエー産大理石柱と、八面の壁には、京都西陣の金華山織が張られ、南側の窓には重厚なカーテンが付けられています。

更に、櫨の寄席木細工の床には、47種類の紫の糸で織られた緞通が敷かれ、迎賓館では最も格式の高い部屋となっています。

肘掛椅子や長椅子は明治の創建時の家具が大切に受け継がれたものです。



花鳥の間

「花鳥(かちょう)の間」は、天井の36枚の絵、欄間の綴織、壁に飾られた七宝焼きが、花や鳥を題材にしていることに由来します。

昔は「饗宴の間」と呼ばれ、大食堂として造られた部屋で、晩餐会のほか、音楽会、諸会議、記者会見などにも使用されます。迎賓館では羽衣の間とともに一番大きな部屋となっています。

室内の装飾は、16世紀半ごろのアンリー二世の時代を中心としたフランスの建築様式で、ルネッサンスの影響を受けたアンリー二世様式です。

国産の樺の柱に、壁板は木曽の塩地材(モクセイ科)が張られ、他の部屋と比べて重厚な感じのする部屋となっています。

130人までの会食が可能で、地下の厨房で作られた料理が配膳されます。

窓掛けの刺繍のビロード地、板壁に張られた30枚の花鳥がデザインされた大判の七宝焼きもこの部屋の見どころの一つです。



安倍総理主催オーストラリア連邦アボット首相
歓迎夕食会 (2014年4月7日)



東 の 間

「東(ひがし)の間」は、迎賓館の東玄関の上の2階にある部屋で、控室、記者会見、少人数の会議などに使われています。

部屋の広さは約100㎡で、三面の窓にはステンドグラスがはめ込まれています。

室内の装飾は、天井ドームや梁、アーチ、壁などにアラベスク模様の植物文様、幾何学的図形など複雑な石膏レリーフを型抜きし、その上に赤、青、緑、黄等の特殊な塗装と金箔が施されたもので、ムーリッシュ様式と言われています。

開館40年を記念し今年の参観で特別に公開される部屋で、壁面に描かれた油絵、腰張りの彩色タイル、28本の薄桃色の大理石柱、椅子、テーブルなどが迎賓館の中でも独特の雰囲気を出す部屋です。

迎賓館は国賓(元首又はこれに準ずる者)、公賓(皇族又は行政府の長若しくはこれに準ずる者)、公式実務訪問賓客(国賓、公賓の対象者で実務を主たる目的で訪日する者)の迎賓施設として、国賓は閣議で決定、それ以外は閣議で了解されて、賓客に提供されます。



モンゴル国エルベルグドルジ大統領記者会見
(2010年11月18日)

